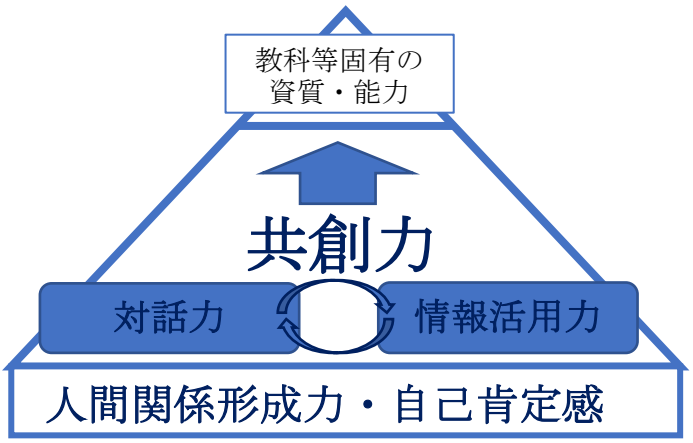
令和４年～５年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究（２年次）
教育課程研究会　活動記録

１　基本情報

(1) 研究主題：「共創力」を高める子どもの育成
～「対話」を大切にした教育活動と「対話」を通じて学びを深める授業づくり～
(2) 研究内容：教育課程
(3) 期　　日：令和５年１１月１７日（金）
(4) 会　　場：五泉市立五泉小学校　　※対面・オンライン公開

２　研究の概要



子どもが生きるこれからの社会は，予測困難で変化の激しいものになることが予想されている。こうした社会を子どもが生き抜くために必要なのは，新たな知識や技能の習得に満足することなく，自ら課題を設定し，その課題解決に向かって他者と対話しながら，新たな考えを創り出していく力である。当校では，そのような力を「共創力（きょうそうりょく）」と定義し，全教育活動を通して育成することを目指した。「共創力」は教科固有の資質・能力を育成するために発揮する力であり，その力は「対話力」「情報活用力」で構成されている。この２つは互いに関係し合い，さらにそれを支える基盤にあるのが，子どもの心理的安全性につながる人間関係形成力・自己肯定感である。

「共創力」を育成するための取組として，対話を通じて学びを深める授業づくりと，対話を大切にした教育活動を教育課程全般の柱に位置付け，以下の５つに取り組んだ。

(1) 「五小授業モデル」による授業づくり
授業の基本モデルとして，①問題意識を高める学習課題の設定，②対話を促す働き掛け，③深い学びを促す働き掛け，④振り返りの４つの過程を位置付けた。比較・分類・関連等の対話を促すための視点や，可視化・焦点化等の対話を促す働き掛け，汎用性や共通点を問うなどの深い学びを促す「深める問い」の要件を洗い出した。

(2) 「共創力」を支えるスキルの育成
校時表に，週２回，15 分のスキルタイムを位置付け，対話力，情報活用力，人間関係形成力等の育成を図った。「共創力」の育成で重要となる対話力をより高めるために，聞き取りワークシートを活用し，「聴く」スキルの育成をはじめ，多層指導モデルＭＩＭの取組，シンキングツールの活用，縦割り班でのグループエンカウンターに取り組んだ。

(3) 全教育活動を通した人間関係形成力・自己肯定感の育成
縦割り班によるふれあい活動等，対話に向かう心理的安全性を担保した教育活動を工夫した。

(4) 関わりや対話を重視した学校行事や各種教育活動
全体計画の策定に当たり，「共創力」を中核に位置付け，目指す子どもの姿や，対話力と情報活用力を育成するための指導の重点を示した。また，育成状況の評価欄を設け，年２回評価・改善を行い，ＰＤＣＡサイクルによる教育の質の向上に取り組んだ。

(5) 家庭や地域と連携した関わりや対話の場の設定

「地域の人と考えるいじめ見逃しゼロ」「家族ふれあい短歌」等，多様な他者と関わり，対話を促す場を工夫し，「共創力」やその基盤を家庭や地域との連携でさらに高めた。

3　授業の概要

(1)　２年音楽科授業について

① 授業者：　木戸　さくら

② 単元名：「さがしてつくろう」

③ 概　要：

本時は，雨の音を組み合わせて，グループで「雨の日の音楽」をつくるという目標に向け，見付けた音楽のわざを使うことで，自分たちのテーマに合った音楽ができることに気付く姿を目指して授業を行った。

課題設定の場面では，音楽のわざを使っていない曲と使っている曲を聴き比べさせることで，音楽のわざを使う良さに気付かせ，「よりよい曲を作りたい」という憧れをもたせた。

よりよい音楽をつくりたいと思っている子どもに，「音楽設計図」と「わざシール」を共通のツールとして渡した。子どもは音楽設計図にわざシールを貼りながら，「わざシールを貼る場所はここでいいのだろうか」という批判の視点を用いて対話をはじめ，自分たちのテーマに合う音楽をつくっていった。本時のねらいに到達させるために，教師は「どんなわざを使ったら，どんな雨の日の音楽ができたか」と問い掛けた（深める問い「効果を問う」）。「音がはねる感じにしたかったから，音色のわざを使って音を高くした。」と，つくった音楽に込められた思いを子どもから引き出し，音楽のわざを使うよさを実感させることができた。

振り返りでは，「〇〇のテーマだったから，～のわざを使ってつくった」という書き出しの型を示し，振り返りを行わせた。「テーマが『雷雨』だったので，強弱のわざを使って音を強くしました。雷が鳴っているように，音色のわざを使って音を長くしました。」など，テーマに合わせてわざを工夫したことを振り返る子どもの姿からも，音楽のわざを使うことで，自分たちのテーマに合った音楽ができることに気付かせるという本時のねらいを達成することができたと考える。

(2)　６年道徳科授業について

① 授業者：　浅川　南

② 教材名：「ロレンゾの友達」

③ 概　要：

本時は，よりよい友達関係を構築するためには信じることが大切であることに気付かせ，互いに信頼し，友情を深めようとする心情を育てることを目指して授業を行った。

この授業では，前時に課題を設定した。前時で子どもに「本当の友達とは」と投げ掛け

て，現在の子どもの友情観を尋ねた後，「そのような友達関係が築けているか」「そのような友達関係を築きたいと思うか」と問うことで，実際は理想とする友達関係を築けていない実態や，理想とする友情関係を築きたいという子どもの思いを引き出し，全体で共有した。そこから，「本当の友達について考える」という切実感のある課題を設定した。

本当の友達について考えたいという子どもに，３人の登場人物の立場に立ってその行動を選んだ理由を話させた。教師は子どもの考えをはっきりとさせるために，「〇〇さんの大切にしていることは何か」と全体に問い返しを行った。考えを焦点化させることで，他の子どもは友達の考えを自分の言葉で説明し始め，全体での対話が促された。さらに教師が「〇〇さんの言いたいことは分かるか」と問い返したことで，子どもは，自分の考えと他の立場の考えを比較していた。立場が違っても，考えに頷いたり，自分の考えを述べたりして，本当の友だちについて多面的に捉えていくことができた。そして，「３人が木の下で話し合ったことをロレンゾに言わなかったのはなぜか」と問い掛けた（深める問い「一般化」）。子どもはロレンゾに言わなかった理由について話し合う中で，「『かも』や『らしい』など分からないことを決めつけてはいけない」と，具体的に「友達を信じる」ことの大切さについて考えることができた。

振り返りでは，授業を経て自分が考える本当の友達について振り返った。子どもは，「本当の友達は，信じて疑わない人。自分も疑ってくる人は嫌だし，疑われた人も悲しくなる。自分は『～らしい』『～かも』って言われた時，適当に流すことがあったけれど，ちゃんと向き合った方がいいことに気付いた。これからは，友達の気持ちを大切にして，友達を信じることを大事にしたい。」などと記述し，本時のねらいを達成することができた。

４　研究の成果

２年音楽科の授業では，指導者の五泉市教育委員会　指導主事　浅間　一城様から，次のようなご指導をいただいた。

- 子どもの問題意識を高めるには，違和感やあいまいさなどの「ギャップ」と共に，学ぶ必然性のある単元づくりが，子どもの憧れに強く影響する。単元構想の段階から，学びを深める授業づくりに取り組む。
- 直感的な思考を先に促す発問が重要である。発問を工夫することで，「なぜ」「どのように」という思いを伝え合う子どもの姿を引き出すことができる。
- 子どもの対話を促し，深めていくためは，対話を繋ぐものが大切であり，子どもが互いに聴き合うことの仲立ちとなるもの，子どもと子どもの間に何を置くかが極めて重要である。

６年道徳科の授業では，指導者の下越教育事務所　学校支援第２課長　磯部　睦様から，次のようなご指導をいただいた。

- 道徳も他の教科と同様，価値項目ごとの単元として捉え，系統的に学ぶことで子どもはより効果的に見方・考え方を働かせることができる。

・　問いを起点に展開する学習活動が子ども一人一人の学びをより深く広いもの，確かなものにするために，どのような問いを立てるのが良いのかをよく考える。学びに主体的に関わらせるためには，子どもが「自分事として答えを見つけたい，考えてみたい」と思える問いであることも重要な要素である。
・　教師が投げ掛ける発問一つの工夫で，対話が盛り上がり，子どもは異なる立場や考え方の存在を知って視野の拡大と思考の深化を図ることができる。また，そうした問いを重ねていくことで思考や理解を深めていくことができる。「深める問い」が，子どもの「考え，議論する道徳」に繋がる。

研究大会講演会では，講師の東京大学大学院教育学研究科　准教授　一柳　智紀様から，次のようなご講話をいただいた。

・　対話は聴き手がいて成立するものである。間違いを否定するのではなく，自分と相手の微妙な差異を受け止めることから，対話が始まる。聴き合うことが重要であり，それが応答の連鎖を生む。
・　一人一人の学びを保証するためにも「スタートラインに全員が立っているか」を確認すること，そして「どんな子どもにも学ぶ可能性がある」ことを教師は忘れてはいけない。いかに子どもの力を信じ，その力を発揮できる機会をつくるかが重要である。

当校の目指す「共創力」を高める授業づくりについて，具体的な方策が明確となった。今後，子どもの聴き合う関係を大切にしながら，有効な手立てや視点・要件をさらに洗い出し，「五小授業モデル」の精度を高めていく。「五小授業モデル」に基づく授業が，教科固有の資質・能力の確実な定着を促し，学力向上に結び付くように取り組む。

５　その他

研究の詳細（授業研究発表会の要項，授業実践の指導案と振り返り）は，新潟県教育支援システム（Tea Room）にて公開。